

Title	ぷらっとシネマ こんな世界を渡すのか『それでも生きる子供たちへ』（M・シャレフ ほか監督）
Author(s)	萩原, 弘子
Editor(s)	
Citation	働く女性の情報誌 いこ る. 2010, 22 (2010 冬号). p.24
Issue Date	2010
URL	http://hdl.handle.net/10466/15472
Rights	



こんな世界を渡すのか 『それでも生きる子供たちへ』(M・シャレフほか監督)

戦争、貧困、HIVなど、現代世界の問題を一身に背負わされて生きる子どもたちがいる。ブラジル、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、中国の監督7人が製作した、そんな子どもたちの物語7話のオムニバス作品だ。どの子の状況も苛酷だ。しかし、苛酷さを訴えるだけでないところが本作の真骨頂だろう。

第1話は、西アフリカの少年兵タンザの物語。内戦で親も村も失った少年たち10人ほどが、銃をもって平和な村を襲撃する。平原で見知らぬ武装集団と行きあえば銃撃戦だ。食料と武器を手に入れるにはそれしかない。或る村を襲撃することになり、タンザは学校の爆破を命ぜられる。時限爆弾を抱えて、だれもいない放課後の教室に忍びこむ。自分が学校に通ったのは、いつだったろう。懐かしい思いをうち消そうとするタンザ。ここから第1話が終了するまでのわずか数分間の映像の意味を、日本の観客は理解するだろうか。黒板に消されぬまま残る設問に気づいたタンザが、チョークで答えを書く。『ジャングル・ブック』の著者は？キプリング。アフリカ大陸の人口は？一5億。フランスの首都は？パリ。この3問に監督が込めた意味は複雑だ。イギリス人作家が19世紀末に書いた作品が、現代でもアフリカを表現する作品としてアフリカで教えられることの矛盾。アフリカ大陸の人口はと問う世界観の大きさ(ヨーロッパ大陸の人口、東アジアの人口という捉え方を私たちはするか)。そして、アフリカの子どもがフランスの首都名を即答できる現在をつくりだした、知識の一方通行の長い歴史(たとえば、西アフリカの大国ナイジェリアの首都を尋ねられても、答えられるフランス、日本の子どもは少ないだろう)。

チョークを置いたタンザは、薄暗い教室で席につく。机に伏して眠るように目をつぶると、それまでカチカチと鳴っていた時限爆弾のタイマーが止まり、静寂が訪れて第1話は終わる。現実的に言えば、タイマーが止まることはなく、タンザの短い人生は校舎とともに砕け散ったはずだが、そうは描かないところに、未来に賭けたい監督の思いを感じる。なお、レンタルDVDの特典映像と解説は、アフリカについての無知と偏見が満載。ゆめ信用されませぬよう。

そのほか、泥棒家族を逃れて孤児院に舞い戻るジブシー少年の物語を独特のユーモアで見せるE・クストゥリツァ監督による第2話。ニューヨークに暮らすヒスパニック・アフリカ系の若い夫婦と、HIV陽性の娘ブランカの苦悩と再生を描くS・リー監督による第3話。サンパウロでクズ鉄を集めて売る健気でたくましい兄妹の、危険も楽しみもあるストリート・ライフを描くK・ルンド監督の第4話など。それぞれに子どもたちの懸命な人生が伝わってくる。苛酷な状況下でも、ただうちひしがれて生きているのではない。生活力旺盛で、夢だっている。小さいながら、ものがよく見えていて、堂々としている。それだけに、つきつけられる問いがある。おとなたちは、本気でこんな世界を子どもたちに渡そうとしているのか。

真摯な作品ではあるものの、第5話だけは見られなくなった。戦場写真を撮る意味を見失ってしまった報道写真家ジョナサンが、幻想のなかで子ども時代に帰り、再び光を見出す物語だ。少年に戻った彼は、森と泉をぬけてどこかの戦場に行き着く。戦火のなか、家族を亡くした世界中の子どもたちがともに生きる姿にジョナサンは希望を見る。

監督はR・スコットとその娘。父は、ソマリア内戦に介入した米軍特殊部隊によるモガデシュ作戦を描いた『ブラックホーク・ダウン』(2001年)の監督だ。同作は、非情で残酷な戦闘場面で見られる。だから反戦映画だという評価もある。他方で、圧倒的物量の爆破と飛び散る肉片といった描写は、血の腐臭に淫するものであり、いわば戦争への誘惑だという批判もある。いやだからこそ、戦争という暗い欲望を暴く反戦映画だという反論もある。私としては、現実にあった1993年のソマリア内戦を描きながら、ひとりとして人格もったソマリ人が登場しないことが、この作品の何たるかを語っていると思う。モガデシュの死闘15時間で命を落としたのは、米軍兵士19人、ソマリ人は350人とも1000人とも言われる。

ジョナサンは、戦争を世界に伝えることの意味を再び確信して、第5話は終わる。しかし彼が、たとえばソマリア内戦の現場でカメラをかまえたとして、その戦争の何をどう撮るか、撮らないかは、もう答えが出てしまっている。

(フランス、イタリア、2005年、124分)